

ガールの馬

虫明亜呂無

講談社

シャガールの馬

一九七八年十月二十日 第一刷発行

一九七九年三月十六日 第三刷発行

著者 虫明亜呂無

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―二二二 郵便番号一―二
電話 東京(〇三)九四五―二二一(大代表)
振替 東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 九八〇円

© Aronmu Mushiake 1978 Printed in Japan
落し本・配し本はお取り替えいたしません。

0093-139706-2253 (0) (文1)

目次

海の中道

6

連翹の街

36

黄色いシャツを着た男

62

タンギーの蝶

100

アイヴィーの城

120

ふりむけば砂漠

142

シャガールの馬

162

ペケレットの夏

190

装帧
辻村益朗

シ
ャ
ガ
ー
ル
の
馬

海
の
中道

第×回福岡国際マラソン選手権大会兼日本選手権マラソンは、十二月の第一日曜日の正午、折からの雨について、福岡市中央区の平和台陸上競技場をスタート、同市雁ノ巣折り返しの四十二・一九五キロのコースで、外国招待選手五名を含む七十八選手が参加しておこなわれた。

気温は三・二度、北北西の風六・三メートル、湿度八十二パーセントの悪コンディションであった。

厳冬を思わす氷雨がコースの行く手をさえぎっていた。その雨の幕に挑むように、選手たちは一団となって市の繁華街をとりぬけ国道三号線を北北東にむかって走った。千鳥橋を渡ると、国道の左手に博多湾の一部が望まれた。海は暗く霽っていた。

先頭集団が五キロ地点を通過したのは、スタート後約十五分三十秒前後であった。かなりのハイペースである。このあたりで、七十八名の参加選手は、それぞれほぼ予定の位置に自分の席を持つに至った。

先頭集団を形成していたのは約二十名の選手であったが、これが十キロ地点をすぎるあたりで、半数の十名あまりの選手にしばらくいられた。彼らは最初の五キロと、つぎの五キロを、正確に十五分三十秒前後で通過した。このスピードについてゆけぬ選手は先頭集団からの脱落をよぎなくされた。近代マラソンは五千、一万のトラック競技の延長と考えられている。スピード優先のレースである。しかし、昔は体力や耐久力の競技とみられていた。選手に要求されたのはス

タミナであり、頑健な意志と旺盛な氣力であった。が、それが単なる迷妄にすぎぬことは、昭和十年代のオリンピック・マラソンの優勝者のタイムが、今日ではまもなく女子でも作れる記録になろうとしていることから証明されている。

私がコーチしてきた氏家茂は、いつもと変らぬ走りかたで、先頭集団に入っている。平和台の競技場を出るところから、氏家は先頭から三、四番手の位置をしめていた。彼は胸を張り、頭を正面にすえ、左右の腕のふりでバランスをたくみに維持し、彼の特徴である足首のバネをいかす走法をつづけていた。が、いつもとすこしも変らぬ、というのが私にはすこし不安に思えた。いつもと変らぬということは、また、おなじような敗退をくりかえすことである。が、彼は少年時代からそういう走りかたしかできない選手であった。それは、彼が生れてからこのかた、彼でなくては生きられない生きかたをしてきたように、今更どのような手段を講じても変えられない彼の走りかたなのである。走法を変えよ、と、彼に望むのは、死んで生れかわってこいと命ずるのとおなじかもしれない。もつとも、このことは氏家茂の場合だけではない。レースに参加した七十八名の全選手についても言えることである。

私は今、氏家茂ほか十名の選手たちが作っている先頭集団から十メートルほど後方を伴走する車の座席で、彼の力走を見ている。私は彼を指導し、彼を一流選手に育てたゆえに、ミュンヘン・オリンピックにマラソン・コーチとして派遣され、以来、陸連強化委員の役割も与えられている。彼の栄光は私のそれであり、私の失意は彼のそれである。私たちはマラソンという肉体競技とおして、肉体の言葉をかわしながら、意志と感情を交流しあってきた師弟である。そんな氏家茂の背中の隆起や、はやくも雨に濡れて識別しにくくなったゼッケンや、彼の腕のふりが空

間に描く目にみえぬ線のつまかさねや、道路の表面を蹴る彼の足が地上に残してゆくリズムの痕跡が、私の視覚や、聴覚や、想像力になにかを訴えかけてきている。私は車体の動揺にさからわずに身体をあずけながら、その訴えを、できるだけ正確に、慎重に、繊細な感情をこめて掬いあげねばならない。

他の選手が氏家と私との間にはいると、一瞬、もしくは、数瞬、彼の姿は私の視野からかき消えてゆく。つい先刻まで私の網膜に映っていた氏家茂があたかも、私が雨の街路に思い描いた私の幻想であつたかのように。先頭集団の選手たちの吐く息と、顔面や腕や背から発散する汗と、ふきあがる蒸気が、雨と凍てついた外気によって、白く尾をひき、靄となって消えていつている。雨に濡れそぼれた冬枯れの都会の午後では、この白い靄もまたひとつの幻影のように思えてくる。すべてを背後へ、背後へと捨てさってゆくマラソンのなかで、白い靄はまるでランナーたちの形見のように、ランナーたちが走り去つたあとでも、しばらく空中をさまようからである。

車内にとりつけられたテレビによつて、先頭集団の最先頭を走っているのは、浜松の空挺部隊から単身レースに参加してきた選手であることがわかる。無名の選手だが、信じられないような意志の力で、十キロまでのスピード競走に耐えぬいてきていた。が、あと十キロもすれば彼のスピードにはわかに衰え、彼が競走を途中で抛棄してしまうのは目にみえている。彼は玉碎覚悟でひた走りに走る。先頭集団の選手たちは長い間の経験によつて、このランナーがレースになにひとつ貢献することなく、彼以外のだれにもほとんど影響らしい影響を与えず、彼は彼自身のために走っていることを見ぬいている。先頭集団に加わっている招待外国選手たちも、ひと目で、このランナーはしろうとだと了解しているようである。走るために走る虚しさや徒勞を実証してみ

せるのが、このようなランナーの宿命である。たぶん指導者らしい指導者にめぐまれず、マラソンはスピードと体力と意志のレースと早呑みこみした青年らしい追いつめられた躁急な孤独感が、彼をここまで走りつづけさせているのである。兵士であるランナーは、陽にやけた肌に、精悍な表情をして、およそ無駄のない筋肉を全身に鎧よろいっているのだが、他の選手たちには、それがいかにも、無条件で先に走らせてよい、危険味のないランナーが若さゆえに身につけた鎧のように映るのである。私はなめし革のにおいのする鎧、遠い未知の国のサバンナを疾走する野獣の皮膚に似た鎧、若者特有のなにかに酔ったような混乱と当惑と錯乱の祭のにおいのしみついた鎧を脳裡に描いてみた。そして鋼鉄の矢に射貫かれることによって、はじめて鎧であることを立証してみせてくれる鎧の内部の鉄の断片や、その断片を結びとめている繊維の感触が、この無名のランナーの走りから伝ってくるのを感じたとき、私は若さの持つ大胆さと、羞恥心と、希求を素直に讚美したく思っている自分に気づいた。が、私は彼を嗤わらうことはできない。彼こそ私や、氏家の過去の姿にほかならない。

伴走車の窓ガラスに雨の滴が幾重にもしたたり落ちてゐる。雨滴のレンズをとおすと、街のたずまいも日常のそれとは様相をかえてくる。私は水族館の水槽の底に身をひそめた深海魚のように、館内の一部からさしこんでくるわずかな光をたよりに、水槽の前をよこぎってゆく人たちの歪んだ姿態や、手つきや、足どりや、表情を、私好みのそれにあわせて勝手に寄せあつめ、崩し、また寄せあつめる作業をくりかえしている。私の視野にはいるものは暗緑色一色に塗りつぶされ、その緑色も暗いは暗いなりにさまざまに変化してゆく。沿道に立って、傘をかかげたまま旗を振る人々の姿は、なぜか昔、出征兵士を見送った人たちの姿を思いださせる。遠い時代、私

が見たこともない光景がさも私の幼少時代に目撃した光景のように錯覚される。旗の波が翻つているのに、群集はかたくなに沈黙を守っている。窓をとざした伴走車内の私には人びとの声援を聞くすべもない。

十五キロは四十五分四十秒で通過した。快記録が予想された。北北西の追風に乗っていたせいかもしれない。行手の立花山の山稜は大部分が黒雲におおわれ、わずかに山の量感だけが、それとなく黒ずんだ緑の遠景から察せられた。九州地方特有の山の一部が奇妙に高く空にむかつて突出するのと反比例して、他の部分が誇張されたように低く沈んだ山の遠景であった。立花山の奥は前岳であろうか。雲がうすれたあたりに雨空から光とおぼしきものが射しこんでいた。私たちの進行方向の右手に、鹿児島本線が走っていた。車輛は連結されたまま雨に濡れていた。どの車輛も窓をしめ、窓には車内の暖房で生じた水蒸気の暈がひろがっていた。私たちを追いついていった列車は、無人の車輛を幾台も牽引していたようだった。康の原、大名という地名がつづいた。選手たちは国道三号線を和白で左折し、福岡県道五十九号線に進入してゆくことになる。あたりには自動車の廃品が荒地の中に山積みになっていたり、裏作しい鍍金工場の塀がならんでいたりした。道幅はかなりせばまってきていた。国道三号線にあった信号の数がおどろくほど減少していた。それだけ道は淋しく、家々のたたずまいも目立たぬようになっていた。

和白には県道にそって、大きなパチンコ屋が営業していた。三百人あまりの客を収容できる規模の店であった。赤や、黄の、セルロイド製玩具と共通したパチンコ台の小さな飾りが、一瞬、私の視野を掠めた。それは店内の照明にはえて、私が幼年時代に見た祭りや夜店の色彩を記憶からよびさましたりした。薄暗い灰色の屋外の色感と鮮かに対比した人工の色が、なぜか私を人恋

しい想いに捉えた。パチンコ屋はすぐ視野から消えたため、かえって、それが私の視覚に与えた刺激は鮮明であつた。パチンコ屋の周囲には数えきれないほどたくさん自動車が並んでいた。近ごろ、九州はもとより、地方の都会では、毎日曜になると、大勢の客が自動車でパチンコ屋に乗りつけ、終日、台の前に坐つて玉をはじくそうである。彼ら客たちの大部分は、私たちマラソン選手の通過にもまったく無関心のものであつた。彼らは自分たちの指のはじきだす玉のゆくえを真摯な眼で追つていた。わずかにごく少数の玉のはいらぬ不運な客だけが、指をとめ、首をまわして私たちに視線を送つたのにすぎなかつた。彼らは彼らの不運を気分転化によつてまぎらすために、やや赤味を帯びた、熱っぽい目で、私たちを迎え、私たちを通過させた。なかには店頭に出てきて、私たちに手を振るものもいた。不運な客である彼らが、私たちマラソン・ランナーの雨をついて走る姿にふと憐れみの表情をうかべていたのが、皮肉である。——私は、今から幾年か前、神戸の街で知子を食事に誘つたあと、よくふたりでパチンコ屋に行ったことを、思いだしたりした。着痩せのする知子が、意外に、ゆたかな肉づきをしている女性であるのを知つたのは、満員の通路で、他の客との接触をさけるため、私たちがやむなく体を寄せあつたときであつた。知子は私の腕をとらえ、体をあずけた勢いで、私を押しだすようにして、パチンコ店からスナックに私を誘つたものだった。彼女は上きげんで、水割りを幾杯か飲み、私が六甲ヘドライプをしないかという、「すてき。行く、行く」と、近づいてくるタクシーにむかつて手を振つた。私はしがない紡績会社の総務部員で、それも、学生時代のマラソン・ランナーとしてのわずかな名によつて入社できた、いわば、員数外の社員にしかすぎず、知子はその会社に入入りの印刷会社の宣伝部の女子社員だった。彼女は器量よしで、どの男とも、軽く口をききながら、あ

わよくば手のひとつも握ってみたいと思わせるタイプの女性だった。総務部員でも彼女を口説いたという社員が幾人かいた。「男の人は私が人事部長でもないのに、なんて学歴や仕事の話ばかりしやはるのやろ。梅原さんは仕事の話も、家族の話もしないから好きやわ」と、知子は私に云った。「だから、梅原さんといっしょにいると楽しいねん」。私たちは六甲の山頂から、神戸の街の遠い灯の明滅を見ながら、たばこを喫った。彼女はマッチの火を両手でかざして、私の鼻のあたりに持ってきてから、火のきえるまで、私の顔をみつめていた。私はたばこに火をつける一瞬、彼女の眼がうるみをおびていたのを認めた。彼女はたばこを指ではさみ、私から離れて……澎湃寄する海原の……という歌詞をくちずさんだ。私はそのメロディをどこかで聞いたことがあると思ったが、歌の題名はわからなかった。「それ、なんていう歌？」「梅原さんを励ます歌よ。私の死んだ父がよく歌っていたの。海軍兵学校の歌なんですよ。江田島健児のなんとかというの」「僕は海軍ではないよ」「そうよ。海軍でも、陸軍でもなくていいのよ、あなたは」「では、なぜ歌う？」「云ったでしょ、強い男になってほしいからって」「僕は強くない」「でも、あなたスポーツやったのでしょ？ スポーツやる人、みんな軍人みたいな人でしょ？ ちがう？ 女はね、好きな男の人には優しくなってもらいたい。そして、優しさが、その人の強さであってほしいの」「無茶云うな」「無茶じゃないわ、ほんとうなの、あなただけはそうなってほしいねん」「僕にはようわからん。まあ、いい歌聞かせてもらうた、有難う」「父は子供だった私をよく肩車にのせて、この歌を歌いながら、夜の街につれていってくれたわ。この歌をうたうと、父のにおいがかえってくるような気がする」私たちは神戸の街にもどり、空腹をみたすため深夜営業の焼肉料理店へ行った。

コースは十八キロ地点に入ってきた。道の左右は田園のひろがりである。新しく建てられたばかりの家が点在していた。家は無人のまま、窓をしめていた。高圧電線塔とおもわれる鉄柱のやぐらが霧のきれ目から、その一部をのぞかせていた。

氏家をはじめ先頭集団の選手たちは、集団のなかで、それぞれ前に出たり、肩をならべて走ったり、前をゆく選手の背後に胸をふれんばかりに密着して、たがいに執拗な牽制をくりかえしていた。十八キロ地点は、ふつう、スピードに自信のある選手が前半の往路で、第一回のスパートをかけるところである。これまでの距離は、選手それぞれの地力ともいうべきスピードで走破してきた距離だが、これからは、馬拉ソンの真骨頂にあたるペースとリズムの競争になる。先頭集団のなかにはひときわ身長の高い外国人選手の肩からうえの部分で、日本人選手の群像をこえて、激しく左右に揺れている。選手たちは相手の出方をうかがっている。相手の走るリズムをきびしく拒否し、相手のリズムが先頭集団そのものの走るリズムの基本になることを忌避する。彼らはたがいに相手の走るリズムを体で感じ、意識で計算しながら、ごく自然なりゆきを装って、雁行したり、併走したり、ときには外国人選手たちをつつむ円陣をつくり、その輪を迅速にひろげたり、せばめたりする。十八キロをすぎて、なお、スピードにいささかのおとろえを見せていない選手たちばかりである。彼らは相手の走力を現実に目の前にして、各自の走る呼吸、スライドの緩急自在な変幻などを察知しつつして、相手の出かたの機先を制するチャンスを狙っている。まことに、地味な、質朴な、単調なレースの経過のなかに、選手たちは、ようやく、真の敵に遭遇した昂奮に体内の血を疼きはじめさせている。もし肉体が仮に言葉を持つとしたなら

ば、それぞれの肉体は、肉体の持主たちの気質や、情緒をはじめ、彼らの人生経験のいくつかを断片的につなぎあわせ、相手の選手に効果的な印象を与えるために、強引な自己告白をはじめるにちがいないと思われる。

「自分は今日は朝から魚をたべたい気持ちなんだ。昼には厚い血のしたたるステーキを腹いっぱい食べたいのさ。夜は韓国料理。カルビの上等なやつ二人前、ロースの極上。ちしゃの葉にみそをたっぷりつけて、中はハツや、タンをいれてね。そう五人前、いただこうか。俺はそんな豪華な食事を毎日摂っている。俺は生活にゆとりがありすぎてね。お前たちとは、生れも、育ちもちがう男なのさ。お前たちは貧しいから走っている。貧しいから名誉が欲しいんだ。栄光とかいう子供だましのようなものをね。だから、お前の走り方は卑しい。ただ前に行けばよい。ただ走って、勝てばよい。それが、お前のマラソンというやつさ。が、俺はちがう。俺は俺の豪華な生活や、旺盛な欲望をみたすために走る」

「なにを云っているんだ。阿呆らしくて、話にもならない。貧しい安アパートの二階に下宿してさ、朝は牛乳一本。せいぜい駅の立ち売りで、うどん一杯。昼は芋の煮ころがしに、鯖の味噌煮一皿。夜は冷やつこに、やつと、鰯のたたき。そして、テレビを見て、週刊誌を読み、時間がくれば膝かかえて、ふとんにくるまって、眠ってしまふ。いったい、なにを愉しみに生きているんだ。そんな貧しい生活をしているから、昼からステーキを腹いっぱい食べられたら、なんて云いだすのさ。お前ははじめからマラソン・ランナーとして失格者だ」

「俺は若い時、電気溶接工だった。電気溶接というのを知ってるか。お前たちが街の自動車工場で、青い火散らしているのを見ているのはちがうぜ。あれはガス溶接さ。あれは素人でもできる